



坂田明グループ (梵人譚) ライヴ・イン北島町

6月15日(金)

開場：午後6時30分 開演：7時
会場：創世ホール3階 多目的ホール
入場料：大学生・一般 3,000円
小中高 2,000円
※当日券は各500円増

出演：坂田明グループ 梵人譚 (ぼんじんたん)
坂田 明〔サクソ、クラリネット、ヴォイス〕
ジョヴァンニ・ディ・ドメニコ〔ピアノ〕
山本 達久〔ドラムス〕
ジム・オルーク〔ベース〕

演奏予定曲：「ハタハタ」「ひまわり」他

主催：坂田明グループ (梵人譚)
ライヴ・イン北島町実行委員会 (☎088-698-1100)

◎日本を代表する天才的サクソ奏者・坂田明が超一流のメンバーを率いて、2年ぶり、6度目の北島町公演を敢行。今回も東北鎮魂の壮絶な名曲「ハタハタ」やチェルノブイリと連帯する「ひまわり」を演奏します。

第24回 徳島12人のフルーティスト による音の贈り物

6月24日(日)

開場：午後1時30分 開演：2時
会場：創世ホール3階 多目的ホール
入場料：1,000円

出演：〔フルート〕
島本佳代、安宅恵美子、香川雅代、岡本真理奈、
浦川優香、森亜紀、久保由美、三段美咲、
高見宴代、飯田緑、鈴江早都子、板東久美
〔ピアノ〕

近藤有香、下竹とも子、富士原萌、清穂花、
篠原暁子、野田由美子、八木佳代、美馬かおり、
平賀理絵

演奏予定曲：「ヴァイオリンソナタ第4番 BMV1017」
「ハンガリー田園幻想曲」
「無伴奏フルートのためのパルティータ」
「フルートとピアノのためのソナチネ」 他

問い合わせ：香川 (☎090-4330-6645)

第4回 阿波・北島 水辺の写真展

6月29日(金)～7月3日(火)

開場時間：午前10時～午後6時
会場：創世ホール2階 ギャラリースペース
入場無料

問い合わせ：北島町商工会 (☎088-698-2275)

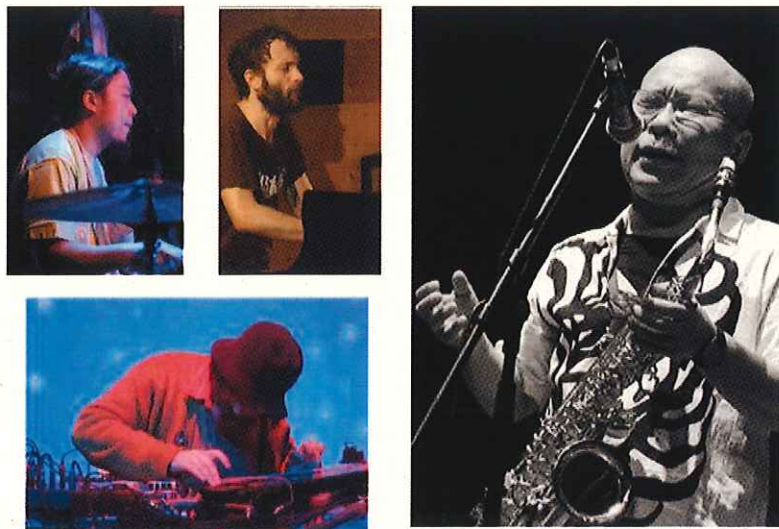
第43回 全日本愛瓢会 徳島県北島町大会

6月14日(木)～6月15日(金)

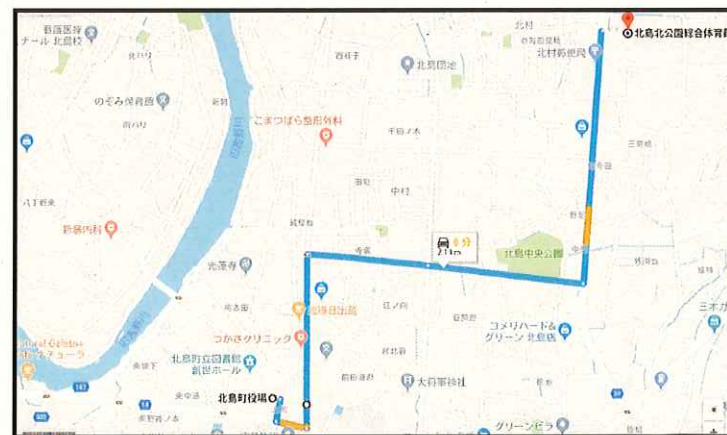
開場時間：午前9時～午後5時※15日は午後3時まで
会場：北島北公園総合体育館(サンフラワードーム)
入場無料

問い合わせ：北島町役場 まちみらい課 (☎088-698-9806)

◎特定非営利活動法人、全日本愛瓢会主催の大会が今年
は北島町で行われます。全国約200人の会員から出品
された様々な作品を、体育館アリーナに一堂展示いたし
ますので、ぜひお立ち寄りください。



→
地図



文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

故郷は地球

～脚本家・佐々木守がめざしたもの②

S F 特撮研究家★池田憲章

■あるいは江戸川乱歩の『怪人二十面相』とか、戦前は、どの子もなかなか本が買えたわけではなかった。それで、クラスの先生が皆で読みたい本を買おうと、子どもたちと一緒に本屋へ行って、おもしろい本を買って、学級文庫にして皆で読めるようにしてくれた。さらに、戦後の続々と発刊される子ども雑誌の中で、例えば、小松崎茂さんの『地球SOS』、福島鉄次さんの『沙漠の魔王』～ランプをこすると巨大な魔神が現われて、それが飛行機と戦ったり、戦車をやっつけたりという空想科学絵物語なんですけど、そういうものに目を輝かせて読む内に、佐々木さんは、児童文学、子どもの読むものって凄いなと、だんだん児童文学の世界に傾斜してゆく形になるわけです。

■やがて佐々木さんは、昭和30年に明治大学文学部に入学するんですね。佐々木さんは、色々な児童文学に接して、どうも日本の児童文学は物足りない。貧しい少年は貧しいままで我慢するんだというような、これでもいいんだろうかと。新しい日本の児童文学はできないだろうか。

■そういうことで、明治大学の中で作られていた《児童文学研究部》というサークルに入って、子どもたちの文学を何とか作り直そうよという動きを始めるわけです。で、人形劇の台本を書いて、人形劇を持って沖縄まで、子どもたちのところに慰問に行くような形の活動になるわけです。

■それで、そういうときに、いくつもの出会いがあった。佐々木さんという人は、人と出会うことによって新しい世界が開けてゆく、ということが劇的に起きる方でした。

■例えば明治大学の《児童文学研究部》の中で新しい児童文学、子どもたちの読みたいものを、童話ではなくて子どもの主体性をしっかりとみすえた少年文学を、作り上げなければならぬといった非常に新しい文学運動の意味を持っていた。例えば今日でも活躍されている、山中恒〔やまなか・ひさし〕さんと古田足日〔ふるた・たるひ〕さんとか評論家の鳥越信〔とりごえ・しん〕さんとか詩人の佐野美津男〔さの・みつお〕さんたちの、その研究会に、若き佐々木守青年は参加することになってゆくわけです。

■ところが当然昭和32、3年ですから、ラジオあるいはテレビの動きがもう始まっていて、新しいマスメディアの動きが子どもたちや、児童文学にも関わってくるわけです。

■古田足日さんなんかは児童文学協会などのような、作家協会の方も手伝っておりますから、佐々木さんは大学生なんですけど、そちらの協会にも出入りをはじめます。そういうところへいくと、子どものことを考えるということは当然社会のことを考えるということですから、そこに哲学者とかあるいは劇作家とか、評論家とか、ドキュメンタリー作家の方たちがたくさん参加されていた。

■そういう中で、ドキュメンタリー映画の作家協会のようなものがあったんですね。記録映画の作家協会が。そこをもう一度立て直すと。機関誌を出すから、バイトをやる人が欲しいという話があってですね、佐々木さんは映画にも興味がありますから、ぜひ僕を使ってくださいと、《日本記録映画作家協会》にアルバイトで編集者になって参加することになるんですね。

■ここには、今日でも大活躍されているドキュメンタリー映像・実験映画作家の松本俊夫さんが中心になって活動しておられました。

■ドキュメンタリー映画というものは、昭和34、5年頃というものは映画自体もフランスでヌーベルバーグの動きが起こっていて、非常に劇場映画の人たちも、あるいは文学者の方たちも、記録映画～ドキュメンタリー的な手法というものに対して、みんなが非常に興味と熱意を持って見つめていた。例えば記録映画作家協会にどういった人が参加されていたか、あるいは原稿を書かれていたかといいますが、例えば花田清輝さん、吉本隆明さん、作家の安部公房、勅使河原宏〔てしがわら・ひろし〕、舞台美術の朝倉撰〔あさくら・せつ〕さん、あるいは関根弘さん、映画監督の亀井文夫さんなんかも参加されていたわけですね。

■そこである種、子どもたちの問題を考えると同時に、映像にも興味を持った佐々木青年は『記録映画』という雑誌の編集に関わる中で色々な先生たちとあって、様々な感化を受けるわけです。そこで松本俊夫さんが「実は、大島渚が今、松竹で映画を撮っている。この映画は大切なものになりそうだ。陣中見舞いに行くから佐々木も行こう」、と言ってですね、佐々木守を引き連れて、松竹の大船撮影所に大島さんを訪ねて激励するわけですね。そのとき大島渚さんが撮影していたのが、「日本の夜と霧」という、非常に社会問題性の高い、当時の1960年安保の状況を照らし合わせた映画の社会派のど真ん中だったわけですね。

■そこで大島渚さんと出あって、佐々木さんは大島さんにも気に入られてですね「また遊びにおいでよ」という形で、大島さんと急接近する形になるわけです。しかも映画というのはどういふものなんだろう、当然、雑誌『記録映画』のスタッフですから、映画の作り方にも興味があるわけですね。「だったら助監督やってみるか」ということで、のちに大島さんの「飼育」や「日本春歌考」という映画の助監督として、佐々木さんは参加することになるわけです。

■と同時に、この出会いが、もう一つの新しい出会いを生むんですが、児童文学の方の詩人だった佐野美津男さんという方がいらっしゃるんですけども、この方がまあ、詩では食えないもんですから、児童文学の方のお付き合いでラジオ・ドラマに接近をしてみたわけですね。佐野さんは子ども向けのラジオ・ドラマをどんどん書いていました。それで、実は新しい作家を求めているので、「どうだ、佐々木、書いてみないか」という形で、ラジオ・ドラマの執筆に誘われた。記録映画作家協会の編集部員だった佐々木さんは25歳ぐらいだったんですけど、佐野さんの紹介を受けてTBSのラジオの「少年ロケット部隊」というドラマに関わった。

■これは「鉄人28号」をかかれたマンガ家の横山光輝さんが原作でした。宇宙人の円盤が地球を攻めてきて、少年たちのロケット部隊が戦うという物語です。なぜ少年たちかということ、大人たちは既に攻撃を受けて全滅してしまっているがために、まさに若い10代の少年たちのロケット部隊が高速ロケット機のパイロットになって地球侵略をする円盤人と戦う、というSFドラマです。これはTBSで夕方やっていたラジオ・ドラマです。佐野さんが一か月書いて、次の一か月を佐々木さんが書くと。

■このときのラジオ・ディレクターが、実はのちに佐々木さんとたくさん作品を作ることになる橋本洋二さんだったわけです。この佐々木守と橋本洋二両名は、一人の放送作家と一人のプロデューサーがどういう形で出あって、どういう風に作品を作ってゆくののかということに関して非常に運命的な二人といつてよいと思います。

■実は橋本さんは、この「少年ロケット部隊」の前に、TBSの社会教養

部という部署におりまして「伸びゆく子どもたち」という、子どもたちのドキュメンタリー構成ドラマを、橋本さんは長くやられていたんですね。今子どもたちがどういう状況にいるのかと。その中で新しい教育運動を進めていた阿部進さんに気付いて、それを取り上げて、それが『週刊朝日』で紹介されて《現代っ子》というチームが生まれた。戦後に子どもたちがベビーブームでたくさん生まれて、子どもたちは大人たちの手になんとうか及ばなくなってきた。子どもたちのことは、子どもたちで何とかする。《かぎっ子》なんて言う言葉もありましたけど。両親が働きに出ていて、アパートに一人で帰ってきて、料理を作ったりとか、子どもたちで遊んでって。僕らも近所の子どもたちと十数人で群れて遊んでおりましたけども、そういう現代っ子みたいなものを見つけてやろうとしていた。そういうドキュメンタリーで磨き上げてからドラマの方に移ったのが、橋本洋二さんだったわけですね。

■橋本さんと佐々木さんが出あって、当然佐々木さんは、児童文学の考え方もか記録映画の考え方もありますから、橋本さんから強い刺激を受けて、佐々木守はラジオ・ドラマの中に入り出してゆくわけです。

■その次に「日本少年」という作品に関わります。これは凄いな設定の作品でした。これはマンガ家の益子かつみさんという方の原作で、集英社の『日の丸』という月刊漫画誌に連載された作品なんですけど、東海太郎という日本人の少年が主人公で、中近東の革命と戦乱の中に身を投じて、人々の自由のために戦うという、後の佐々木守を知る者からしたら、「そんな若い時代から革命かよ」ということになるんですが、そんなラジオ・ドラマも佐々木さんは書いていたわけです。

■そうする中で、TBSはもうテレビに動き出していますから、テレビの方から佐々木さん書いてみないか、というような話が巡り巡ってくることになるわけです。そういう放送作家としてラジオをやり、またテレビもやってゆく中で、佐々木さんは新しい少年文学の方向性をみすえてゆきます。

■佐々木さんがおっしゃっていたのはですね、夢中になって本を読んだり、テレビを見たり映画を見たりすることの大切さです。いつか自分の生活を忘れるぐらい夢中になって書物を読むようなことがいかに人間を洗うといいますが、ニュートラルにさせるか、それは重要なことなのだ、ということが考え方としてあるわけですね。そして童話的な、悪も善もない夢みたいな話よりは、『快傑黒頭巾』のようなエンターテイメントの視点を持つことが実は必要だと片方で思っていたわけですね。

■そんな集大成として、橋本洋二さんと手がけたのが『戦国忍法帖』という作品で、これは1963年から64年まで13か月間にわたって、放送されたTBSの忍法ラジオ・ドラマですね。これは桶狭間の戦いから始まって、木下藤吉郎に父を殺されたイッキジョウウタロウという少年忍者が、「いつの日か、仇の木下藤吉郎を討つ」という目標を持ち、戦乱の中で甲賀忍者・伊賀忍者の戦いに巻き込まれてゆく波乱万丈の物語なんですね。

■当時は忍者ブームで、僕らも「隠密剣士」とか「忍者部隊月光」とか漫画の「伊賀の影丸」に夢中になっていたのですが、佐々木さんも負けてはならじと様々なアイデアを詰め込んだ忍法を生み出しました。例えば全身の汗腺から汗を一気に出すと、それが霧のようになって一瞬姿が見えなくなって、そのすきに敵を倒すという怪忍者や、あるいは沖縄の忍者は三味線を弾いて超音波で脳を揺さぶって相手を失神させてしまったり。しかも番組の終わりに、「この忍びの術は…」と言ってTBSのアナウンサーがもっともらしく科学解説を行なって、聞いている人を煙〔けむ〕に巻く《今週の忍者コーナー》のようなものもあった（笑）。【次号に続く】